

# 指導資料

## 図画工作科・美術科 第46号

鹿児島県総合教育センター  
令和元年10月発行

対象  
校種

幼稚園 小学校 中学校  
義務教育学校 特別支援学校

### 「先生、これでいいですか。」からの脱却

#### － 基本的な考え － 絵に表す活動の指導①

絵に表す活動は身近な造形活動であり、全ての造形活動の基本となる活動です。一方で、教師にとっても、子供たちにとっても、悩ましい課題が山積する活動でもあります。新学習指導要領に基づきながら、絵に表す活動の指導のポイントについてシリーズで解説します。

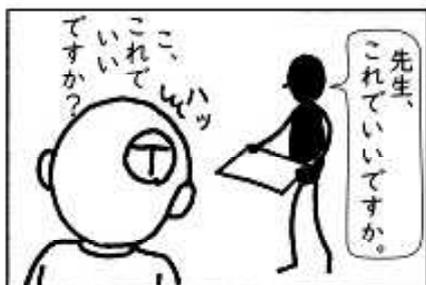
#### 1 「先生、これでいいですか。」

題材の終盤、子供たちから、「先生、これでいいですか。」という言葉が寄せられることがあります。皆さんは、この言葉に違和感を感じたことはありませんか。



この言葉を聞いたときの違和感は、子供たち自身の作品であるにもかかわらず、子供たちが、「これでいいですか。」と、作品の完成について教師に許可を求めていることから感じられる違和感です。子供たちからこの言葉が寄せられるまでには、次のような状況があると思われます。

- 授業の中で、教師から子供たちへ、教師がもつ「よい絵」のイメージに近付けるための指導がなされていた。
- 授業以前に、大人から子供たちへ、大人の考える「よい絵」、「子供らしい絵」の視点による作品への批評や、理想に近付けるための指導や言葉掛けがなされていた。



子供たちの作品を「よい作品にしたい。」という願いは、教師が当然もっている願いです。だからこそ私たち教師は、**「よい作品とは、どのような作品なのか。」**ということについて考えなければならないのではないのでしょうか。そして、私たち教師には、子供たちが「自分にとって本当に価値のあるよい作品」を表現することができる指導について考えていく必要があるのです。

本シリーズでは、小学校図画工作科の「絵に表す活動」を切り口としますが、「絵に表す活動」だけではなく、幼児教育の「表現」から、小学校での「図画工作科」、中学校での「美術科」、高等学校での「芸術科(美術, 工芸)」までの美術教育全般につながるものとして理解していただくと幸いです。

## 2 「子供たちにとって価値あるよい作品」とは

よい絵って、どんな絵  
なんでしょうか…。



活動の中で子供たちは、自分の思い(主題)を基にして自分の作品や活動を見つめ、「この形で合うかな。」「色はこれでいいかな。」と自己内対話を繰り返しながら試行錯誤し、表現していきます。この自己内対話や友達との意見交流の中で発揮され、高められていくのが「思考力、判断力、表現力等(従来の「発想・構想の能力」と「鑑賞の能力)」です。また、試行錯誤しながら表現する際に発揮され、高まっていくのが「技能(従来の「創造的な技能)」です。このように主題の実現に向けて試行錯誤しながら表現することで、子供たちには資質・能力が育まれていくのです。

そして、主題を実現するために試行錯誤して完成した作品は、結果的にどのような仕上がりになっていたとしても、子供たちの主題が反映されており、子供たちの成長に必要な作品であったということになります。これがその子供にとってよい作品であり、よい作品は、「子供たちの数だけ」存在するのです。

教師の助言や指導も、子供たちに、「主題を実現するにはどうすればよいか。」と考えさせ、子供たち自身が試行錯誤する中で実現できるように行う必要があります。主題の実現へ向けた助言や指導を心掛けることで、子供たちからは、「これでいいですか。」ではなく、「こんな感じにしたいのですが、悩んでいます。アドバイスをください。」といった課題解決を意図した言葉が発せられるようになるのです。

指導しているとどうしても作品の出来映えが気になってしまいます。しかし、教師が出来映えを気にすると、教師がイメージする「よい絵」にする指導になりがちであり、子供たちの資質・能力を育成するという目的を実現することが難しくなります。以上のことから、一つの型や方法に固執した指導や、特定の表現のための表し方を身に付けるような偏った指導を行うことは、厳に慎むべきなのです。

### <コラム> 学習指導要領解説から

学習指導要領解説では、小学校の「絵や立体、工作に表す活動」、中学校の「絵や彫刻に表現する活動」の内容について、次のように示されています。(強調は筆者)

…児童が感じたこと、想像したことなどのイメージから、表したいことを見付けて、好きな形や色を選んだり、表し方を考えたりしながら技能を働かせて表すことである。学習活動としては、児童は、およその目的やテーマを基に発想や構想を行い、自分なりの技能を活用しながら表し方を工夫して思いの実現を図っていくことになる。(小学校学習指導要領解説図画工作編p27)

…これらの活動では、表したい主題を生み出し表現の構想を練るなどの発想や構想に関する資質・能力と、発想や構想を基に材料や用具などを工夫して表す技能が組み合わせられて働くことが重要であり、学習としてこれらの資質・能力を明確にし、調和を図って育成することが求められる。(中学校学習指導要領解説美術編p26)

つまり、絵に表す活動は、他の造形活動と同様、子供たちが「思い(主題)」を実現するために行う活動であり、その自己実現を図る中で資質・能力を育成する学習活動なのです。



## 4 絵に表す活動の流れ



発想を広げ、構想を十分に練ることが極めて大切になるので、①のエとは別にアイデアを固める「発想・構想の場面」を設定する必要があります。特にポスター等の「**機能的な表現**」に取り組む際は、目的を明確にする必要があるため、「発想・構想の場面」でも「中間鑑賞」を行うことが効果的です。

そして、題材の最後に自分の活動を振り返らせる中で、これらの試行錯誤により主題を実現できたことや、創造性を発揮できたこと、自分たちの資質・能力が高まったことを実感させることは、学びを深める上で大きな意義があります。

－引用・参考文献－

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説図画工作編』平成29年
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説美術編』平成29年
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説芸術編』平成30年 (教職研修課 福森 真一)

子供たちの、思考の流れを考えると、こうなりますよね。



従来、絵に表す活動の流れは、活動の特性から、「線描(下がり)」→「彩色」の二つの場面で考えられることが多かったのではないのでしょうか。子供たちも、画面全体に色をのせると、「できた。」と、活動が終了したように捉え、表現への意欲を失いがちになります。しかし、**完成へ向けて、主題と自己の表現を照らし合わせながら試行錯誤していく時間は、創造的な技能を発揮する大切な時間であり、図画工作・美術科の授業において外すことができない時間です。**

そこで、子供たちの思考の流れを考慮し、活動の流れを下

順	種	子供の姿(例)
①	ア	「表現したい」という思いを高める・主題をもつ。
	イ	題材のねらいが分かる。
	エ	思い(主題)を基に表現したいもの・ことについて発想・構想を広げる。
②	ア	アイデアスケッチをする。
	イ	新しい技法を学ぶ・試す。
	エ	構図・配置を決める。
③	ア	主題を意識して彩色する。
	イ	新しい技法を学ぶ・試す。
	エ	色彩の美しさに気付く。
④	ア	主題と作品を〔共通事項〕を視点として照らし合わせ、課題に気付く。
	イ	課題の解決へ向けて試行錯誤を繰り返す。
⑤	ア	互いの表現に感じたよさを、〔共通事項〕を視点に分析し、言葉にして伝え合う。
	イ	自分の取組を振り返る。

のように設定することが望ましいと考えます。特に子供たちに伝えておきたいのが、**一度彩色が終わった後、更に仕上げるために、④の「仕上げる場面」を設定することです。**そうすることで子供たちに、全体に色をのせ終わっても主題を実現させていくために更に工夫し続けることが重要であることを、題材の最初から意識させることができます。

また、③と④の場面の間に、友達と意見交流をする「中間鑑賞」を設定することは、活動の転機となり、主題を追求していくのに効果的です。

なお、読書感想画のような想像を広げて表現する題材では、

表1 絵に表す活動の流れ

順	種	子供の姿(例)
①	ア	「表現したい」という思いを高める・主題をもつ。
	イ	題材のねらいが分かる。
	エ	思い(主題)を基に表現したいもの・ことについて発想・構想を広げる。
②	ア	アイデアスケッチをする。
	イ	新しい技法を学ぶ・試す。
	エ	構図・配置を決める。
③	ア	主題を意識して彩色する。
	イ	新しい技法を学ぶ・試す。
	エ	色彩の美しさに気付く。
④	ア	主題と作品を〔共通事項〕を視点として照らし合わせ、課題に気付く。
	イ	課題の解決へ向けて試行錯誤を繰り返す。
⑤	ア	互いの表現に感じたよさを、〔共通事項〕を視点に分析し、言葉にして伝え合う。
	イ	自分の取組を振り返る。

中間鑑賞

次号は「思いをもつ場面」